

スウェーデンにみる〈家族〉の変遷と 「ファデル（ゴッドファーザー）」の今日的意義

野村 祐之

<要旨>

先進諸国で少子化、高齢化が問題となり、IT化の影響も相俟って人間生活にとって基本的な家族のありかたが根本的に問われている現在、スウェーデンはこれらの問題を先進的に受け止め、いまや社会福祉の概念をも乗り越えて新しい展開を見せつつある。本稿では、スウェーデン社会における家族の変遷を歴史的に跡付け、その中で教会が果たしてきた役割を考察し、とくに最近、スウェーデン語で「ファデル」（英語ではゴッドファーザー）と呼ばれるキリスト教古来の信仰的親子関係が復活の兆しをみせていることに注目し、新しい時代の家族像の可能性についてファデルの今日的意義を考察してみたい。その概要は、中世以来、教会教区を基盤に展開した農耕社会の互助的大家族の伝統は、前世紀の急速な工業化につれて、都会で賃金生活をする核家族へと解消し、教会との結びつきは希薄になる。これと平行して社会福祉制度による互助を目指し、70年代迄にそれを実現した。しかし、核家族のありかた、結婚の形態はさらに変化を遂げ、IT化の進む中で家族は個人へと解体していく。この過程でスウェーデン社会は核家族を前提とする福祉制度と福祉の差別性を克服し、個人を基本単位とする「生活者社会」へと発展的に変遷を遂げている。いまや事典に「福祉」の項はないという。

これは家族を前提にするこれまでの社会制度からの積極的なパラダイムシフトとみられ、社会の基本単位としての個々人の価値観、人生観が新たに問われ、家族のあり方にしても各個人の間で自由で親密な内的結びつきが前提とされ、教会の伝統にそれを再発見する兆しがみられ、幼児洗礼とその際に「ファデル」をたてるという、キリスト教会の古い伝統が新たに積極的に取り入れられて来ている。信仰上の第二の両親を設定するこのシステムは、個人化社会の中で新しい拡大家族を形成する可能性を秘めている。キリスト教の伝統においてこそ事情を異にするが、大変革の時を迎えている日本社会が参考にし得る示唆が多く含まれていると思われる。

キーワード：家族、核家族、スウェーデン、福祉、生活者、子ども、キリスト教、教会、拡大家族、ファデル、ゴッドファーザー、教父、名親、教保
ノーマリゼーション（ノーマライゼーション）

Keywords: family, nuclear family, Sweden, Christian church, socialsystem, *fadder*,
godfather, godparent, normalization

I. はじめに

一般に社会を構成する基本単位は家族と考えられるが、最近わが国ではその基礎となる核家族の存在基盤が問われる状況が現出している。少子高齢化、教育、生育環境といった社会的問題から家庭での個室化、ひきこもり、生活時間の個別化など、また最近のIT化によってその傾向は急速に進んでいるように思われる。家族としてアイデンティティーを確認する機会すらほとんどなくなり、核家族がバラバラの個人に解消する寸前にあるような印象すらうける。これは「家族中心社会」の終焉なのか。それとも、家族という集合体を超えた「個人単位の世界」へのパラダイムシフトなのか。かりに後者だとすれば、個人の集合体としての新しい社会にとって、家族とは何なのだろう。種の保存と世代交替のためには何らかの形での男女の出会いと子育てを保障する環境の確保が必要となる。しかしそのために伝統的な家族の形が果たして必要なのか。先進国に共通するこの傾向にいち早く気づき、先験的、積極的にこれに対応する社会システムを築いてきたスウェーデンに注目し、その歴史と現在の状況の把握から始めよう。

II. スウェーデンの歴史と家族形態の変遷

ここではスウェーデン人の歴史理解の流れに沿って、家族の変遷とその背景を概観する。スウェーデン人に自国の歴史を尋ねると、多くの場合、次のような時代設定で答えが返ってくる。歴史研究としてではなく市民の自己理解としての歴史イメージがここに息づいている。

1. 前史としてのヴィーキング時代。10世紀前後まで。
2. 中世：キリスト教化と王国成立の時代。11～15世紀。
3. 近代：独立、ルター派国教に。軍事大国の時代。16～18世紀
4. 現代：ナポレオン戦争以来の中立・戦争回避の二百年。19世紀～現在。

II-1. ヴィーキング¹⁾の時代。10世紀前後まで。

ヴィーキングは入り江（ヴィーク）に共同体を形成し農耕を営みながらも海外との交易、略奪、傭兵などで経済的文化的利益を得ていた。その活動は北極圏から地中海、東はロシアから西はコロンブスより500年以上早く北米大陸にまで達していた。これは彼らがラテン圏西方教会、ギリシア圏東方正教会という当時のキリスト教世界の全域とイスラム世界とも接触のあったことを示している。男たちが海外遠征に出る間、家庭と畑を守るのは女性と子どもの仕事だったが、身分の上下よりも各自の技量が評価され、自由が尊重された民主的社会だったという。

II-2. キリスト教化と王国成立の時代。11～15世紀。

現代のスウェーデン人にとってヴィーキングは伝説的で、直接のつながりを自覚するのはキリスト教化したこの時代からである。それは読み書きできる修道士たちが記録を残していることとも関係する。また彼らは内陸を開拓し農耕文化を広げた。土地は教区ごとに区切られ、その中心には木造の教会があり、日曜、祝祭日には村人がこぞってミサに集う。スウェーデン語のソッケン（教区）はソクン（尋ね求める）が語源だがその原風景がここにある²⁾。

祈りやミサの時間を知らせる鐘の音は時の区切りを告げ、教区の隅々にまで届いた。いや届く範囲を教区と定め、その内側で人々の生活が完結していたのだ³⁾。修道院の指導の下、自然を相手に老若男女が支え合う大家族を形成し、十分の一税⁴⁾を教会に納める生活と教会は日々、緊密につながっていた。当時の修道院ネットワークはラテン語を介して西欧全域とつながっていた。また生活困窮者、孤児、未亡人、老齢者、障害者、罹病者を受け入れる救護施設（ホスピス）を設け、貴族や富裕階級からの献金をあおぐ形で福祉のシステムを形成していた。

II-3. 独立、軍事大国の時代。16～18世紀

グスタフ・ヴァーサ国王はデンマークからの独立を果たし、圧倒的な海軍力を持つ軍事大国を築き上げる。ドイツ留学した聖職者たちが持ち帰った宗教改革者ルターの教えを国教として、ローマとの関係を解消したが神学論争はなく、現実の教会はミサの言葉がラテン語からスウェーデン語になった以外はほとんどかわらず、民衆の生活にさしたる影響はなかった。

スウェーデン教会の静かな宗教改革で注目しなければならないのは、教皇庁と正面衝突しなかったため聖職者のカトリック継承権が有効で、ルター派教会であるにもかかわらずローマ・カトリック教会に一番近いプロテスタント教会なのである⁵⁾。

この時代にそれまでの木造教会は石や煉瓦造りになり、教区が農地簿から道路維持、保健衛生など地方自治の中心的役割を担うようになる。住民の記録管理は21世紀を迎えるまで教区事務所が行っていたので、多くのスウェーデン人は四百年前まで先祖を溯ることができる。

筆者はスウェーデン中部、ダーラナのレトヴィーク村で復活祭の真夜中のミサに出席したが、14世紀の聖堂の祭壇（17世紀バロック）の前ににひざまづき聖餐を受けるとき、それを授ける牧師が着る復活祭の式服は15世紀末（コロンブスと同時代）に作られたもので、それ以来毎年使われているとのことだった。ロウソクの光の中で守られるミサは、五百年前とほとんどかわらず、これからもきっと変わらないだろうという、時の継承をイメージさせる。村人にとっては遠いご先祖や何世紀も後の子孫たちもきっと同じ体験をするのだと実感し、ミサの終わりを告げる「昔も今も常しなえに、アーメン」という祝祷の言葉を胸に響かせるのだろう。

II-4. 軍事大国返上、スウェーデンの平和的選択。

19世紀初頭、皇帝ナポレオンの破竹の全欧制覇の前に北の軍事大国スウェーデンは歴史上稀にみる奇策を打った。敵にまわすと恐ろしいナポレオンを味方につける秘策とは、彼の強力な軍隊を統率する将軍をスウェーデンの世継ぎの王子にいただく、というものであった。戦わずしてスウェーデンを手中に収めることになるこの申し入れをナポレオンは受諾。ベルナドット元帥はスウェーデン王室に婿入りし、後のカール14世となる。今の国王もその血を引くという⁹⁾。これ以上に驚嘆すべき同国の決断は、軍事大国政策を転換し、外交と情報力による非同盟中立を宣言したことではないだろうか。以来二百年、現在まで中立を守り通している。この伝統がハマーショルド国連事務総長を生み、国際紛争調停役としての活躍にも見られる。

ところが軍事大国の華々しさと引き換えに得たのは、自活ぎりぎりの貧農国であった。北極圏に接する苛酷な気候の下、ジャガイモ、雑穀、酪農製品にたよる生活である。

筆者が訪ねた南部スコネ地方の農家では、半世紀前まで冬の寒さをしのぐため豚をベッドに入れて寝たと語る老人に出会った。森を開いた農地の際に建つ古い木造の家は天井が低くベッドはまるで子供用で、豚と寝たというのは横にじゃなくて上下だったのでは、と冗談をいいたくなるほどだが、それが当時の農民の体型だったという。「スウェーデン人が大きくなったのはここ50年。われわれは皆、親より大きく育って自慢したのさ。日本もそうじゃないのかい」と同行のヨンソン牧師はいう。

もっともこうしたライフスタイルの背後にあるのは単に貧しさだけでなく、自然のただ中で生活する「森に住む人」の理想でもある。自然は神が創られ人に管理を任されたもので、人には属さない。いや、すべての人に属する。だから現在の法律でも、人は生活のため土地の所有権を売買することはできるが、自然に生えた草花、きのこ、果実、野イチゴや木の枝はいくら自分の土地のものでも占有する権利はなく、他人が立ち入って摘んでいいことになっている！そういったスウェーデン人の心の風景は国民的画家、カール・ラーションが家族を描いた水彩画（たとえば『わたしの家』のシリーズ）に見ることができ、今もこよなく愛されている。

II-5. 貧農国からの脱出。工業化社会と「国民の家」のビジョン。

19世紀中期のスウェーデンはヨーロッパの最貧国のひとつで、飢饉にみまわれ、保存用の種芋も底を突くと、子どもを売って生きつなぐか、家族と共に国を去るしかなかったという。19世紀末から20世紀初頭には人口の4分の1が米国へ渡った⁷⁾。「無事大西洋を渡っても障害や病の疑いがあれば門前払い。言葉がダメだとなじられ、名前をアメリカ風に変えられ、頼る親戚でもなければ読み書きもできない貧農には苛酷だった」と移民の経験をもつ高齢のルーベンソン牧師が話してくれた⁸⁾。旅費がたまとスウェーデンへ戻る者も多く、彼らはアメリカの合理的、実利的な考え方やメソジスト、バプテスト、長老派などの信仰を持ち帰っている。現在のスウェーデンが難民、移民を実に優しく迎え入れ、世界の

紛争、貧困地域からの養子が家族の一員として愛され育てられている背景にある歴史的記憶でもある⁹⁾。

工業化には他に遅れをとっている。19世紀には英国への鉄鉱石輸出（当時の英国が輸入していた鉄鉱石の8割はスウェーデン産）をきっかけに技術導入を図り、また森林は製紙業の資源となり、豊富な水力にも産業利用の道が開け、19世紀後半に全国的鉄道網が整備されると急速に進展した。また知的労働力確保のため、教区毎に学校が無償で設置された。若い労働力は農村から都市部へ流れるが、教会、教区とのつながりは希薄となり、夫の収入に頼りアパートに暮らす核家族という形態が広がっていった。生活上の問題は教区や隣近所に相談できない状況で労働者の生活向上の牽引役となったのは労働運動と消費者運動とであった。この両者は労働の機会と収入の確保とその収入の有効な支出の援助という家庭生活維持の両輪をなした。

産業社会では自然相手の農耕社会と異なり、合理的に秩序だった組織によってすべてが計画的に管理、運営される。19世紀後半には社会民主労働党（以下、社民党）が生まれ、また同時期には庶民の間での文化活動も盛んになる。それは王室から下賜される高尚な文化とは異なる、民衆の生活に密着した民芸の再発見であり現代の洗練されたデザインにつながっている。

20世紀初頭、全ヨーロッパが大恐慌に巻き込まれ、ナチスが台頭する中、スウェーデンは非同盟中立を貫くことを再確認し、内政的には社会民主主義的改革によって貧農の中流国家を脱して合理的工業化の道を進むにあたり、国全体を家族とみる「国民の家」のビジョンを打ち立てた¹⁰⁾。後のいわゆるスウェーデンモデル¹¹⁾誕生のきっかけである。ちなみに、賀川豊彦はこのありかたに注目し、「中庸を行くスウェーデン」（チャイルズ、1936年）という本を38年に訳出し、その序文で日本もスウェーデンに学ぶべきだと勧めている¹²⁾。

中立を貫き戦争に加担しなかったことがついに項を奏する時が来る。大戦後ヨーロッパの復興需要である。鉄鋼、銅、木材、水力の資源と技術力とによって得た巨益をスウェーデンは福祉国家建設のインフラに投入する。こうして、「国民の家」の理想を一挙に実現させる機会を得、60年代後半には世界に冠たる福祉社会を築き上げたのである。この理想実現のリーダーシップをとった社民党2代目党首エランデルは今でも国民の父として記憶されている¹³⁾。

高福祉、民主制、地方自治の3つの柱の内、福祉については、人生のあらゆる段階、状況で必要とする援助を社会の集会的努力で提供することをめざし、それを維持するには国民の高負担が求められる。それを可能にしたのは平和、自由、平等、機会均等社会への揺るがぬ確信と、責任の自覚、教育、協力の精神、困難を分かちあい克服してきた記憶、最大善を実現させようとする強い意志、合理精神があいまってのことである¹⁴⁾。

Ⅲ. 「福祉社会」の差別性と、その先にあるもの：ノーマリセーリング。

福祉社会の実現は「黄金の60年代」を築いたが70年代には実現した福祉社会システムへの批判が表面化した。当時の石油危機、産業構造再編による低成長といった経済事情もあるが、より本質的な疑問が提出された。今日では「福祉」の概念は発展解消されて政策用語としては死語と化し、百科事典にもその項はないという。それを包含するのは、「国民が日常生活に支障を来さぬように備える政治」を意味する「社会政策」の項だ¹⁵⁾。また「障がい者」も統計上の項目から消えたという。カロリンスカ大学で看護学を教えるビルギッタ・ルーベンソン講師によればこうだ。「福祉社会」は結局、社会の不平等を解決できず、むしろそれを固定化させた差別的な社会になりかねないからだ、と「福祉」という言葉が差別語であるかのような語調で語った。福祉予算はその対象者の存在を前提とする。社会の周辺に追いやられた人々である。「福祉予算」に補完されながら彼らを周辺に追いやる社会システムは温存されていく。しかし、すべての人に自分らしく生き生きと納得のいく人生をおくる自由と権利があるとすれば、この制度は周辺化された人々をその自由と権利から遠ざける働きをする。

彼女によれば、「障がい」は持って生まれた特質ではなく、「障がい者」という特定の人も存在しない。各人のもつ固有性がある状況下で不都合として立ち現れるとき、そうさせるものが障害なのである。「あなたはスウェーデンでは言語障害に直面している。わたしがいくら博士号を持っていても東京へ行けば認識障害に陥り、知的障害に苦しむでしょう。日本語では、自分で自由に情報を獲得し知的判断を下すことができないですから」。そもそも障がいとは、時と場合によって誰もが持ち得るものなのである。人が障害を意識せざるを得ないのは、人為的に不都合がもたらされたり放置されたときで、それはその人にとってノーマルな、好ましい状態ではない。「バリアフリー」という考え方もまさにこれと期を一にしている。それは「障がい者」に親切にということではなく、誰もが「障がい（バリア）なく自由に」行動できるような工夫のことだからである¹⁶⁾。

ノーマリセーリング（ノーマライゼーション）という考え方¹⁷⁾はもともと60年代に知的ハンディを持つ人の福祉的処遇を巡って生まれたもので、実践の結果はインテグレーション（統合）ということになる。誰にも自分らしい生活を満喫する権利がある以上、自分の意志に反して引き離され隔離されてはならない。スウェーデンでは、収容型施設によるケア・システムは20世紀に解消され、現在はひとつもない。今では町中の普通の住宅で、あるいはグループホームという形で支援を受けながらも普通に日常生活を送り、結婚も子育てもしているということだ¹⁸⁾。これも現代の新しい家族の形である。これは高齢者のケアや外国出身の人達の処遇についてもいえる。誰も隅へ押しやられることなく、受け入れられていると感じ、自分の場をみつけ、安心して暮らしていけるのがインティグレーション（差別のない融和的統合）の進んだ社会である。「誰もが自分らしく（ノーマリセーリング）みんないっしょに（インテグレーション）」暮らせる社会。スウェーデンは「福祉社

会」の差別性を超克し、そんな「生活者社会」を構築しつつある。

IV. 個々人を基礎単位とする「生活者社会」と家族、そして子どもたち

IV-1. 「個人単位社会」のバラエティに富む家族のかたち。

ノーマリセーリング（自分らしく）とインティグレーション（みんな仲良く）。それは家族生活についてもいえることだ。家族のあることが障害となったり、家族の一員であることで障害に直面したり、その人の意志に反して家族の犠牲になるメンバーがあってはならない。とはいえ家族である以上、とくに子育てや介護、看護を巡っては「仕方がないけどせざるをえない」のは当然、とスウェーデン人は考えない。そうしたことの殆どは家族の責任ではなく、公的責任として社会で受けとめ分かち合って共に担われるべきことなのである。育児や教育、病気治療や介護、老後の生活支援は社会の責任で、本人や家族がそのために余計な心配や無駄な努力をする必要はない。子どもが生まれれば、育児休暇にしろ医療費、中学までの教育費ばかりか、教科書、教材教具、文房具、交通手段も無料なうえに、子供の月々の生活費、お小遣いも支給される。これは子どもの承諾の上で保護者の口座に一旦振り込まれ保護者の管理下に置くが、あくまでも子どもの生活費であって親が手をつけたり理由なく手渡しを拒否してはならない。自分のお金だから欲しい服や雑誌も注意深く吟味した末に買い、友達と映画を見てアイスを食べたり、自由に楽しく使っている。本はかわずに図書館で借り、服は友達同士で交換したり、足りない分は家や近所でのアルバイトで補ったり、と知恵を働かせてやり繰りしている。小学生でも家父長的力の行使や経済的管理から自由で、親と子は経済的にも自律した関係なのだ。

また、家族は、まさか血統維持装置ではない。実の子か養子かと問うこと自体、ナンセンスである。子連れ離婚した同士が再婚すれば他人同士だった子どもたちはたちどころに兄弟姉妹となる。親が法律婚をしているかどうか、家族であることは全く関係ない。88年以来、スウェーデンで生まれる子どもの過半数は婚外子である。この背景には、88年の「同棲法」以来、同棲カップルは「サムボ」と呼ばれて認知されている事実がある。また95年には同性同志のカップルの登録が（いわゆる結婚としてではないが）公認され、03年に同棲法の内に組み込まれて以来、同性カップルが養子を迎えるチャンスも得られ、両親が男女でない家族も公認されるようになった。女性の同性カップルの場合、人工授精で子を得ることも事実上認められ法的認知も近いといわれる。人工授精によらず男性協力者を得て子を設けた場合、親権がその男性に生ずるため、子を産んだ女性（親権者）のパートナーには真の家族でありながら親権が認められない。これは現行法で親権者は2人以内とされているためだが、それはこの規定が核家族を前提としているためで、いま対応が検討されているという¹⁹⁾。

統計的には核家族が圧倒的に多いとはいえ、核家族といえども内面的には個人化が進み、家父長的統制意識は全くなく、個人単位社会の家族形態のひとつの選択肢としての核

家族なのだ。

IV-2. 個人単位社会の個人としての子どもたち。

個人の自由と権利を平等に保証する社会で、家族のありかたや親子関係のありかたにも選びとりの幅も広い中、問題となるのは子どもの立場である。この自由も社会制度もおとなが勝手に決めたもので子供にとってはお仕着せになり兼ねない。そもそもこの世に生まれ出たこと自体、文字通りア・プリオリ（生得的）なことだったのだ。そういう子どもたちがいかに社会の一員として、生き生きと安全に安心して自分らしく暮らせるか、そのために社会環境をどう整えるのかが問われるのだ。これは子どもを特別扱いすることなく、彼らのもつ特質を尊重したバリアフリー環境をどう整えればいいかという問題である。

その問への答えの模索の一例を身近なところからみてみたい。スウェーデン社会の基礎的行政単位はコミューンである。日本でいえば市町村に近いが自治能力が圧倒的に強く、「スウェーデンは290のコミューンの集合体だ」といっていい程なのである。これは「国民の家」の理想を反映した家族国家の座が、教区に由来するコミューンにあることによる。コミューン中心社会の特徴は、住民の発言力が大きく参与の関心も高いこと、そして全国津々浦々、どのコミューンに住んでも生活の質の格差が非常に小さいことである。

コミューンの決定事項には住民すべてが従うことになる。だからその意志決定には住民すべての意見が反映される必要がある。外国人でも3年間住めば住民と認められ選挙権、被選挙権を得る²⁰⁾。子どもも住民だから意見が反映されなくてはならない。そのため議会の代議員には「子ども枠」があり、小学校の生徒会から選ばれた代議員は子どもを代表して議会に出席し、議案の討論と決議に参加する。ストックホルムから100キロほど西にあるストレングネス・コミューンでは小学生500人毎に一人の代議員（11歳以上）が生徒会で選ばれ議会に送り込まれていた。代議員は議会開催中、学校の授業には出られないが、これは社会科の実践教育と認定される。スウェーデンの教育は「こどもたちは遊びながら学び、自分自身で発見する」²¹⁾という「遊び学び」の考え方にも明らかなように実践的な体験学習を基本とするので、代議員の経験ほど得るところの多い教育チャンスも少なからう。代議員にならなくても、小学4年生以上になると自分が経験してみたい仕事を町の中から選び、2週間、その店なり事務所なりの職場に通勤するという体験学習があるので、議員に選ばれた子だけが特別なわけでもない。筆者の〈娘〉（関係については「ファデル」の項で説明。）も11歳から14歳まで代議員だったが、学校でも他の生徒から議会で訴えてほしい、と提案を受けるという。公園でタバコを吸う大人がいて困るとか、信号が変わるのが早すぎてお年寄りが苦勞していたとか。するとそれを実地見聞し、次の議会に提出する。上記二例は取り上げられ改善されたケースとの事。

個人単位の生活者社会のあるべき姿として、年齢の別なく個々人が尊重され、みんなで協力し、それを次世代につなげていこうとするコミューンぐるみの真摯な姿勢が感じられる。

V. 教会への新しい期待と「ファデル」の制度

V-1. 国教会の民営化、新しい世紀の新しい役割。

中世以来、統治者が変わり社会制度が転換する中、教会が教区で草の根レベルの人々の共同体の支えとなってきたが、それは精神面のみならず、医療、教育、社会奉仕、福祉、介護といった生活面、また住民登録や身分保障、財産管理といった民法的分野にも渡って社会を底支えするしかたで、伝統をはぐくんできた。20世紀に入るところからの急速な工業化、都市化と共に大移動が起こり、教区との結び付きは弱くなり、教会が歴史的に果たしてきた社会的役割は公共の社会制度に受け継がれていった。「国民の家」のビジョンも高福祉社会の実現もその前提にキリスト教的価値観の伝統とそれに基づく総意あってこそである。

60年代末から70年代前半にかけて、社会のありかたが学生運動などで根源的に問われる中、スウェーデン国教会の旧態依然とした存在は批判の対象となり、多くの若者を中心に潮が引くような教会離れが起こった。

2001年を期して国教会制度は解かれ、いわば民営化された。教会側では多くの人々が離脱することを想定していたが実際には2%に至らなかった。留まった98%の人の多くは日曜毎に礼拝出席するほどの熱心さはもちあわせないが、スウェーデンの良心、伝統、誇りとして教会は存続してほしいと願っていることが教会が実施した全国アンケートでもわかっている。

個人単位社会では各人の価値観、人生観が問われ、いわゆるニューウェーブのヨガ、禅、星占い、新宗教などに魅かれる人々がある反面、とくに子どもが生まれ家庭形成ということが強く意識されたとき、改めて教会の伝統の中に心の支えを求める傾向もみられる。そうした動きの中でも特に顕著になって来ているのは、若いカップルが赤ちゃんの生まれるのを機に結婚届を出し、子には幼児洗礼を受けさせる傾向である。70年代に教会を離れた世代の子どもたちがいま親となり、それを機に教会での信仰生活に戻って来ているのである。幼児洗礼にあたって必ず希望するのはわが子に信仰上の親、「ファデル」をたてることである。ファデルとは古語で「父（現代語ではファール）」のことだが、今日では洗礼式で結ばれる信仰上の父、母を意味する。別の表現の「グートファール」は英語のゴッドファーザーに当たる。

V-2. 「ファデル（ゴッドファーザー）」の古い伝統。

キリスト教教会では最初期から受洗者への教育的配慮から先輩の信者が保護者、介添え役としてついた。これはラテン語で SPONSOR と呼ばれ、英語の「スポンサー」はこれに由来する²²⁾。オックスフォード英語辞典 (OED) では SPONSOR の第一義として、「[教会用語] 洗礼式で幼児に代わって応答する者。ゴッドファーザーあるいはゴッドマザー」とあり、第四義に、「放送プログラム、その他の見世物の費用を拠出し見返りに商

業広告をするもの」とある。GODFATHERの項をみると、「1. a. 男性のスポンサー（ゴッドチャイルドとの関係における）。ローマ（カトリック）、ギリシア（正教）、英国国教、その他の教会において洗礼執行時に参じ、受洗する人に代わってキリスト教信仰の告白をし、その人の宗教教育を保証する人（一般的には少なくとも男女の二人）。これらの人は受洗者との間、また相互間に靈的關係を生じるとの観点から古英語（8～11世紀のアングロ・サクソン語）では「god-」を前置するようになり北欧諸語にもこの用法が広がった」とある。英語の初出例の西暦1000年頃はまさにスウェーデンがキリスト教化され出したところである。ちなみに GODFATHER の項の最後に、「アメリカのマフィア的首領、「ファミリー」の頭目、「ドン」。マリオ・プーゾの小説、『ゴッドファーザー』（1969年）に基づくフランシス・フォード・コッポラ監督の映画（1972年）の影響による。」とあるのはお愛嬌だが、日本ではこの意味だけがひとり歩きしている。

中世に入り、幼児洗礼が一般的になると、代父母の役割が強調されるがこれは親に万が一のことがあった場合、その子をわが子として引き受ける社会福祉制度としての役割が期待されたことにもよる。福祉制度が発達した現代、この意義はほとんどなくなり、元来、東西キリスト教会が共有する伝統だが²³⁾ 多くの教会ではただ伝統的習慣として残っているのが現状だ。

V-3. 今日における「ファデル」とその新しい意義。

今日、個人単位社会の出現によって家族の形が問われるなかで、「ファデル」は血縁を超えた新しい拡大家族的親子関係の契りとして、新たに意義を見いだしつつあるように見える。

人間は関係性の中で自己形成してゆく。今日、IT化とあいまってあふれる情報の中で、人間関係を涵養する機会はむしろ貧しいものとなり、深い内的対話の相手不在の状況が生まれているのではないか。スウェーデン社会においては「ファデル」の中に、伝統的には「家族」が継承し担ってきた、親密で継続的な、信頼に基づく人間関係を再獲得する可能性のひとつを見いだしつつあるように思われる。筆者自身、30年来のスウェーデンとの関わりの中で、16年前、親友夫妻の求めに応じてファデルとなり、現在、15歳になる「娘（ファデルベルン＝ゴッド・チャイルド）」をスウェーデンに持つがその経験も踏まえながら実情をみてみよう。

ファデルはどのように選ばれるのか。誕生を控えた親が希望するか、幼児洗礼準備の段階で牧師から促されて希望するとなると候補者探しが始まる。条件としてはスウェーデン教会の場合は、ファデルの意味と責任を理解し同意する、洗礼を受けたキリスト者であればいい。カップルであればより望ましい。大家族時代からの伝統で親戚から誰かという場合もあるが、友人の中から選ばれるのが一般的である。いずれにせよ選ばれる者にとって名誉なことである。

ファデルが実効をもつのは幼児洗礼のときである。通常、生後2週間目から数カ月以内

に、日曜日の礼拝の中で洗礼式が守られる。そのとき新生児を抱き、牧師の質問に答え、誓約をし、幼児を牧師に手渡し、受洗後、祝福された幼児を受け取るのはすべてファデルの役割である。その間、生みの親はかたわらで一部始終を見守るだけである。式の後の記念撮影が終了すると、初めて実の親は受洗したわが子をファデルから渡されて抱き、いっしょに写真を撮ったりする。それほどに、洗礼式ではファデルが準主役（主役はもちろん幼児）なのである。この折、受洗記念にファデルからもらった聖書や祈祷書を生涯の宝として大切にしている人も多い。

洗礼後の子どもはもちろん実の親の元で育つが、親はファデルに報告したり相談したりして子育てをわかちあい、しばしば「あなたの娘が」と、遠慮なく自分の子の自慢話をする。

ファデルが特別な意味を持つ次の機会は14歳の堅信礼の時である。これはいわば内実を伴う成人式で、子供たちは一年かけて教会主催の勉強会や修養会で準備を重ねた末に迎える。人生で結婚式にも劣らぬ大切な機会だが、これへの参列をもってファデルの公の役割は終わる。しかしその親子関係は、実の親子と同じように、ときにはそれ以上のものとして生涯つづく。

一昨年夏、筆者も娘の堅信礼に出席した。昨年春には15歳を目前にし、初めての一人旅の目的地に東京を選んだ。親もさすがに驚いたが、喜んで送り出してくれた。これもファデルの信頼関係あればこそ。「妹に」と、実の娘に着古しのかわいい服をたくさん持ってきてくれた。

V-4. 子どもにとっての「ファデル」の意義。

いったい子どもにとってファデルとはどんな存在なのか。二十数人にインタビューした内容の一端を聞き書きのまま羅列してみよう。

子どもとして：親に何かあったときにすぐ頼れるのがファデル。病気、事故、災害、両親がうまくいかず離婚ってこともある。とにかく突発的に何か起こったり、どうしようもなくなったとき親に次いで、心配せずに頼れるのがファデルである。もし親と喧嘩して、出ていく！となったとき行く先に困らないし、親も余計な心配しなくていい。親と話しあったこともファデルと話せば違う見方ができる。恋の告白、学校のこと、家のこと、親に相談できないこともファデルには正直に話せる。それよりも何よりも、自分のことを愛し、いつも思っ、祈っていてくれる人がいるということが励ましとなる。たとえ兄弟でもファデルは一人ひとり違う。自分とファデルの間には世界でたったひとつの付き合いがある。そんなとき自分はユニークだと感じられ、そんな自信をもっていいとファデルも応援してくれる。自分も将来、だれかのファデルになって、子どもの力になってあげたい。

ファデルとして：子どもにとっていちばん身近なロールモデルだ。個人として、カップルとして、家庭人として、キャリアを持つものとして、子育てやお料理、趣味の上でも。両親は近すぎて客観的に成人男女としては見られないし、お手本としての役割は大きい

ファデルだって完璧じゃないし、失敗することがあっても、それと取り組み解決する姿をみてもらえばいい。ファデルに重ね合わせることで親のこともよく理解できたりする。また親もファデルから言われてわが子の別の面を発見することも度々だ。ファデルっ子がいることがファデルの人生にとっての慰め、励ましとなることがしょっちゅう。恩も義理もなく互いに支えあう関係だ。歳をとり老いるという現実を、自分はファデルの姿を通して学んだし、それが自分の将来への心の備えになった。高齢化した現代だからこそ、子ども時代だけでなく、こんどはファデルにお返しをする機会が与えられる。ファデルが生涯を通してもうひとつの親子関係になってきた。

まとめ

スウェーデン史にみる家族の変遷は、農耕文化から都市工業化、そしてIT化と産業の重心が移る中で、社会の基本単位が大家族から核家族、そしてついには個人単位へと展開していく流れがあることを見た。この経過は、それまで家族に負わされていた生活上の重荷を社会が制度的に分ち合い、家族をその重荷から解放する歴史でもあった。そしてやっといま、義務感や伝統的役割分担から解放されて、家族が自由に心を開いて愛しあい支えあいながら共に生きる、真に人間的で親密な共同体としてのありかたを再獲得するに至ったのだ。この歴史総体の底支えとなってきたのは教会の伝統に反映されたキリスト教精神であった。幼児洗礼を機に、信仰と愛によって結ばれた親子関係、「ファデル」が、新しい拡大家族の地平を拓くカギとして再発見されつつあるのは偶然ではないだろう。スウェーデン社会がその歴史と伝統に根差しながら、絶え間ない努力を重ねた末に開示し、実現しつつあるこの新たな家族関係を現代の日本社会的コンテキストで（血縁を超えた親子関係としては「親分—子分」という伝統的関係もあるにはあるが！）どう受けとめたらいいのか、われわれに問われるところである。

註

- 1) スウェーデン語の発音。英語式の発音ではヴァイキング。
- 2) アグネ・グスタフソン『スウェーデンの地方自治』（穴見明訳、早稲田大学出版部、2000年）7～9頁。藤井威『スウェーデン・スペシャルⅢ—福祉国家における地方自治』（新評論、2003年）43頁以下。
- 3) 鐘のことをスウェーデン語で「クロッカ」というが、これは時計も意味し、また時刻の「時」の「クロッカ」も、日常の時を告げる教会の鐘の音に由来する。英語の「時計」clock（「時」のo'clock）もこれと同源。
- 4) 教会献納十分の一税。大陸では6世紀以来、設けられていた制度で8世紀、カロリング朝はこれを国法で徴収していた。ルイス・レッカイ『シトー会修道院』朝倉文市、函館トラピスチヌ訳、（平凡社刊）533頁。
- 5) スウェーデン教会ストレンジネス監督区監督ヨナス・ヨンソン博士、談。

- 6) 元シグツーナ教会主任牧師、ペール・ラルション牧師、談。
- 7) 岡沢憲芙『ストックホルムストーリー―福祉社会の源流を求めて』（早稲田大学出版部、2004年）173頁。
- 8) 筆者の妻の父方の祖父、フランシス・ヨンソンも20世紀初頭にスウェーデンから移民し、米国での名前は「フランク・ジョンソン」になっていた。
- 9) 岡沢憲夫、前掲書。171～2頁以下。
- 10) 前掲書。222頁。
- 11) 前掲書。249頁。生産は資本主義的競争により、分配は社会主義的平等にという政治経済システム。現実的には05年夏の時点で見ると（カッコ内、円換算）、スウェーデン人労働者の8割は年収30万クロネ（460万円）以下で、所得税32%。
それ以上だと国税20%が加わり52%、45万クロネ（690万円）以上は57%。これに消費税、書籍新聞6%、食品12%、他は25%、医療費は無税となっている。
- 12) 藤井威『スウェーデン・スペシャルⅢ―福祉国家における地方自治』（新評論、2003年）、73頁。
- 13) 岡沢憲芙、前掲書。230～231頁。
- 14) 岡沢憲芙、『スウェーデンの挑戦』（岩波書店、1991年）76～87頁参照。
- 15) 竹崎攻『スウェーデンはなぜ生活大国になれたのか』（あけび書房、1999年）、99頁。
- 16) 前掲書。91頁。
- 17) 藤岡純一編『スウェーデンの生活者社会：地方自治と生活の権利』（青木書店、1997年）、181頁も参照。
- 18) ノーマリセーリング（ノーマライゼーション）という言葉について。「ノーマル＝正常、アブノーマル＝異常」という考え方でとらえるのは誤解のもと。語源的には中世の石工や大工の物差しの類をさし、職能、組合、親方によって独自、固有の基準があり、それぞれがそれに従って仕事をし、たとえば大聖堂がみごとに建ち上がる。個々人が自分なりに納得のいく生きかたをしながら誰も疎外されることなく共同体の一員として（インテグレーション）日常生活をおくる状態にすることがノーマライゼーションである。いわゆる障がい者の社会的処遇をめぐる北欧諸国中心に議論されたノーマライゼーションの思想は70年代には英語圏を始めとして世界的に認知され、80年の国際障がい者年を契機に中心的思想となっている。これについては、二文字理明編著「スウェーデンにみる個性重視社会」、桜井書店、2004年、103ページ以下参照。
- 19) 善積京子編『スウェーデンの家族とパートナー関係』（青木書店、2004年）、117ページ以下、（第5章釜野さおり『レズビアンカップルとゲイカップル』）。
- 20) 岡沢憲芙、前掲書。180頁。
- 21) L・O. スンド『スウェーデンの教育』遠山真学塾編集部訳、（遠山真学塾刊、2005年）、『序文』のリンドストローム・スウェーデン大使の言葉の引用。
- 22) たとえば米国合同メソジスト教会の式文では幼児洗礼の項では SPONSOR が使われている。
- 23) この制度をもたないプロテスタント諸派にはカルヴァンの流れを汲む長老派、組合派、ピューリタンと、バプテスト系、福音派諸派などがあるが、日本のプロテスタントでは聖公会、ルーテル派以外の日本キリスト教団などでは一般的ではない。

参考文献

- レングランド塚口淑子『女たちのスウェーデン』、ノルディック出版、2006年。
- アーネ・リンドクウィスト他『あなた自身の社会―スウェーデンの中学教科書』川上邦夫訳、新評論、2005年。
- L・O. スンド『スウェーデンの教育』遠山真学塾編集部訳、遠山真学塾刊、2005年。
- 坂本 進『ヨーロッパ統合とキリスト教』、新評論、2004年。
- 善積京子編『スウェーデンの家族とパートナー関係』青木書店、2004年。
- 二文字理明編著『スウェーデンにみる個性重視社会』、桜井書店、2004年。
- 岡沢憲芙『ストックホルムストーリー―福祉社会の源流を求めて』早稲田大学出版部、2004年。
- 藤井 威『スウェーデン・スペシャル(III)福祉国家における地方自治』新評論、2003年。
- グスタフソン『スウェーデンの地方自治』穴見 明訳、早稲田大学出版部、2000年。
- 今関恒夫他『近代ヨーロッパの探求―3、教会』、ミネルヴァ書房、2000年。
- 竹崎 攻『スウェーデンはなぜ生活大国になれたのか』、あけび書房、1999年。
- 藤岡純一編著『スウェーデンの生活者社会―地方自治と生活の権利』青木書店、1997年。
- 岡沢憲芙『スウェーデンの挑戦』・岩波新書、岩波書店、1991年。
- ルイス・レッカイ『シトー会修道院』朝倉文市、函館トラピスチヌ訳、平凡社、1989年。